

## 随 想

### イタリア紀行

佐々木 教祐

イタリアへ行きたいというのは、10年前に急死した画家の叔父・佐々木一郎(一祐)氏の画集を編集した時からの思いでした。生前叔父の兄善祐氏に個展開催について相談していたようですが、その善祐氏も体調を崩し亡くなりました。残された160点ほどの油彩を記録として残すため、素人の私が画集を作ることになりました。叔父は戦前パリに留学し岡本太郎氏らと親交があり、昭和15年に帰国し、銀座資生堂ギャラリーで個展を開いております。またパリで会った横光利一氏の小説「旅愁」のなかに佐々として登場しています。岡本太郎氏は久慈、横光氏自身は東野として出てきます。そんな華々しい時代も第2次大戦を契機に絵を描くのを断念せざる得なくなりました。しかし晩年また絵筆を持って亡くなる時まで描き続けました。

叔父の画集を作るにあたり、図書館で色々な画家の画集をみると、作品には題名が必ず入っています。しかし数点だけがキャンバスの裏にメモのような書き込みがあるだけで、それ以外資料は何もありませんでした。叔父は教会などの建物を好んで描いておりましたので、苦肉の策として観光ガイドブックを見たり、パリやイタリアの建物を描いた画家の画集を片っ端から調べ同じような絵を見つけ出して題名を付けました。そんな経緯があったので、一度描かれた場所に行って確認しなければとの思いがあったわけです。

叔父の油彩には次のような建物がありました。ヴェネツィアでは、ビザンチン様式のモザイク画が美しいサン・マルコ寺院とゴンドラの乗り場から対岸に見えるサン・ジョルジョ・マッジョーレ教会。フィレンツェでは、かつてのフィレンツェ共和国で宗教の中心であった白、ピンク、グリーンの大石の幾何学模様の美しい大聖堂ドゥオーモ、その前に立つ八角形の洗礼堂、大聖堂の横に立つジョットが設計した鐘楼。フィレンツェから車で1時間ほど西に走った所にある海辺の街ピサにある「ピサの斜塔」です。ピサ大学にいたガリレオが斜塔で「落下の実験」をしたということはピサ市民にとって誇りになっているとのことでした。この塔は1173年に着工されましたが、建設途中から傾き始め、

まっすぐになるようにどんどん建設を続けました。地元でバナナの塔と呼ばれるこの塔は、倒れる危険性があり長い期間登ることが禁止されていましたが、最近日本の建設チームが倒壊を防ぐ工事に成功したので、予約制で塔に登れるようになっていきます。5度の傾きで止まっているとのこと。この敷地には斜塔と白く輝く大聖堂ドゥオーモと洗礼堂がセットになって建てられています。ローマでは円形闘技場コロッセオです。コロッセオはネロ帝の黄金宮殿の庭園にあった人工池の跡地に紀元80年に建設されました。当時は5万人を収容し強い日差しを遮る布を張る装置もあり、そこでは猛獣と剣闘士、剣闘士と剣闘士の凄惨な見せ物が行われました。初期の頃は水を引き入れて船を浮かべて実際の海戦をして見せたようですが、人気が無くなると地下が作り替えられ猛獣や剣闘士が地下からせり上がってくるような装置が作られました。中世にはコロッセオに使用されていた建材は他の建築物に流用され続け、その大理石はサンピエトロ大聖堂にも使用されています。それにもかかわらず往時の姿をとどめているのは、迫害されたキリスト教徒がここで殉教したと伝えられているため、一種の聖地となっていたからです。今年の6月、叔父の油彩に描かれた14枚の建物を実際に訪ね、これら歴史ある美しく荘厳な建物と深い信仰にじかに接し叔父の描きたかったものが少し分かったような気がしました。

私にはもう一つ訪ねたい場所がありました。それはポンペイの遺跡です。紀元79年8月24日のベスビオ火山の爆発で灰が降り積もり、時が止まってしまった町です。私は遺跡を見学し、そこに生活していた人々を想像するのが好きでシルクロードの遺跡をたくさん見に出かけました。しかしこのポンペイの遺跡は、ベスビオ火山が爆発し、火山灰が降りはじめ逃げようとする人々や動物の姿そのものを見ることができるのです。灰に埋もれた犠牲者の身体が時とともに腐朽分解し、できた空洞に石膏を流し込んでできた石膏像は、人々の形態や姿勢を忠実にとどめています。死を迎えた人の表情はおろか、着衣のしわ、ヘアスタイルまで完璧に保存されています。壁に描かれたフレスコ画から風俗が分かりますし、白壁に赤い字で残された沢山の落書きはそこに生きていた人の生の声を聞くことができます。ポンペイではかなりの人々が簡単な読み書きできたようです。このように2千年前の庶民一人一人の生活がタイムカプセルに封じ込められたように見られる遺跡は世界中でここしかないのです。

(名古屋大学名誉教授)